

自分の山は自分で守る

昨年11月号から2回にわたってお話して来た「たまには山へ恩返し」だが、そもそも、なぜ一般登山者が参加する登山道整備を企画したのか説明しておきたい。

皆さんも常々感じていると思うが、21世紀に入るところから目に見えて気候が変わって来た。梅雨がないはずの北海道に梅雨前線が張り付き、これまで上陸することがなかった台風が頻繁に北海道を襲うようになった。ゲリラ豪雨と呼ばれるような集中豪雨が登山道を削り、侵食が目に見えてひどくなる。

こんな状況に胸を痛めているのは私一人だけではないと思い、当時の環境省東川自然保護官に相談して、2011（平成23）年9月に登山道の荒廃状況を見て回るエコツアーを企画した。最初のツアーは、東川と旭川から8名が参加してくれた。ツアー終了後の参加者の感想は「一般登山者にできることがあればぜひ協力したい」というものだった。

翌年のツアーには、登山道整備のプロを講師として招き、登山道整備が加わった。「石ころ一つ動かしてはいけない」という国立公園の特別保護



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然ガイドなどで活躍する人たちをリレーしています。



たまには山へ恩返し in 旭岳「参加の皆さん」
(昨年9月2日、裾合平で)

地区で登山道の改変を行うには、地権者や登山道管理者の許可や同意が必要になるため、関係者の尽力は大変なものだったろうと想像する。そしてこれが突破口になって、一般登山者が登山道の維持管理にかかわることが出来る道筋がついた。

その後5年を経て、去年は参加者100名近いイベントに成長した。「自分の山は自分で守る」を合言葉に、大雪山を愛する人たちの手で、楽しく登山道整備をする場として今後も続けていきたい。

山楽舎BEAR 佐久間 弘



ラトビア風カラオケ

東川町国際交流員 (CIR)
クリスタ・ボグダノヴァ

東川町に来てから、あっという間にもう3年間半が経ちました。飛行機を降りて日本の地を踏んだ瞬間から「これは見たことがない」や「これはラトビアにはない文化」といろいろ驚きましたが、日本の生活が長ければ長いほど、異文化に慣れてきたこともたくさんあります。その中から一つを選び、皆さんに紹介したいと思います。

毎年、東川町とラトビア・ルイエナ町の交流事業が行われています。その時、私は東川町を訪ねてきたラトビアの人々に日本文化などを教えることがあります。異文化のことを聞かれたいら、「あっ、これはラトビアと違いますね」と言ってしまうが、聞かれなければ、慣れてしまった異文化を普通のことのように思ってしまう、説明しようと思わない時もあります。

毎夏、ルイエナ町の高校生4人が東川町に来訪して、ホームステイをしながら日本のことを学びます。その時、東川のことを聞かれたり、高校生と日本文化を話し合ったりします。

「昨日、何をしましたか？」と聞いてみたら、去年東川を訪ねた高校生の一人は、「ホストファミリーと買い物などをして、カラオケにも誘われましたが、怖いから行きませんでした」と答えました。

それを聞いて、なぜ怖いか分からなくてビックリしました。歌が上手でなくても楽しいだろう、と思ったからです。そして歌があまり上手ではなかったら、「歌が下手だから行きたくない」という答えが出てくると思います。やはり高校生が言ったことの意味が分からないので、理由を聞くことと決めました。

「なぜ怖いですか」と聞いてみたら、「ステージに上がるのは怖いよ」と答えました。それを聞いて、やっと高校生の気持ちが分かりました。「あっ、そうだ！ ラトビアではステージに上がって、みんなの前で歌うんだ！」と思い出しました。

それは、カラオケと一緒に来た友達の前だけではなく、カラオケに来た他のお客さんの前で歌うということなんです。場所はカフェやレストランなどで、自分の歌いたい曲名を紙に書いて出して、司会に呼ばれたらステージに上がって歌います。この違いを知ると、日本のカラオケを知らないラトビア高校生の怖かった気持ちが理解できますね。皆さんがラトビアでカラオケに行く時は覚悟を決めて行ってください。